

日本軍戦死者の遺骨収集

附：大本営参謀の責任

伊佐 二久 陸士55

安倍首相は数年前大東亜戦争の激戦地硫黄島を視察し、遺骨収集の加速を指示した。当時は戦没者2万2千人のうちまだ半数が残っていた。

米軍は約5千人が戦死したが、今はただ一人だけが見つからないという。米軍は400人の専門スタッフがおり、年間50億円の予算を使って活動している。

日本では戦死した英霊の遺骨がまだ115万も残っているとされる。経済的には発展しても、これでは国のために命を捧げた英霊に対し申し訳ないという思いである。

ニューギニアでも多数の戦死者があったが、遺骨収集のため現地に滞在し、遺骨収集に26年もかけている人がいるという。

オーストラリアのジャーナリスト、チャールズ・ハペル氏がニューギニア島東南端のココダ街道で日本語の石碑(高さ1.7m)を見つけたが、現地人の説明でこれは元日本兵の西村幸吉氏が建てたもので、彼は戦後単身でニューギニアに渡り26年も戦友の遺骨

収集を続けたという事が判明した。

彼の小隊は56名中55名が戦死、彼も3発の銃弾を受けたが幸いただ一人命拾い、「死んだら必ず遺骨を拾いに來るから」と約束しており、これを守ったということである。

ハペル氏はこれに感激して、「文字通りよるめいた」と言っている。彼は西村氏の凄まじい人生をまとめようと決心し、西村氏にもインタビューし、2年がかりで『ココダの約束』という書にまとめて出版している。

西村氏が建てた石碑は最大の激戦地エフォギ村にあるが、激戦は昭和17年(1942)9月に起こった。

総兵力1万の日本軍は英植民地の中心都市ポートモレスビーを目指した。オーストラリア軍は退却しながら要所で日本軍を迎え撃つ戦法をとっていた。エフォギ村では西村氏の部隊が敵の背後から奇襲攻撃したが、敵も反撃し機関銃弾がシャワーのように降り注ぎ、戦死者が相繼いだ。

その後日本軍はポートモレスビーまであと1日の地点まで進攻したが、軍の半数を失い、補給も尽き果てて敵陣地攻略の可能性は失われ、9月に撤退命令が出され、皆が残念がったという。その頃西村氏は負傷のため、また右の肩と腕は動かせなかったが歩行は可能で皆と一緒に撤退した。

歩けない傷病兵は担架で運ばれたが、彼らは疲労している戦友に申し訳ないという気持ちから、「どうかここに置いて死なせてくれ」と懇願していたという。

マリアアや飢餓に苦しみながら敵軍の追跡を逃れて日本軍は撤退したが、その苦しみは彼の体重が73kgから30kgに落ち込んだことから想像できる。帰国後、彼は工作機械の会社を経営し成功したが、戦友の遺骨を拾いに行くという気持ちは全く変わらず、結婚もこのことを条件にしている。

その間も日本で戦友の遺族を訪ねて喜ばれている。昭和54年(1979)ごろ、彼は生活を切り詰め、軍人恩給と会社、土地を売った僅かな金で旅費を工面し、戦友たちが待っているニューギニアにやってきた。

彼は現地で深いジャングルの中で昔の記憶をたどりながら道を開き、地雷探知機で反応があれば手で土地を掘り起こし遺骨を収集した。多くは身元不明のため小屋に保管し、帰国したとき護国神社に納めた。

身元が判明した遺骨は遺族を一軒一軒訪ねてお渡しした。ある海岸で金歯が4つある遺骨を発見、日本で68番目の家を訪ねたとき、その家族が「ニューギニアで弟を亡くしたが金歯が4つあった」と聞き、その遺骨を渡

したら、その頭蓋骨を抱いて泣き続けた、と聞いている。

ココダ街道周辺でオーストラリア軍と米軍は3095人の戦死者を出したが、このため豪政府はいくつもの記念碑を建て、ボマナ国立墓地もある。しかし日本軍は1万3千人も戦死したのに日本政府が建てた記念碑は僅かで、中には維持費を出さないため地主が西村氏に援助を頼んだこともあった。西村氏は維持費と土地税のため毎年1万円を出すことに同意している。

平成17年(2005)、西村氏は厳しい熱帯の重労働のため病に倒れて入院し、帰国して娘と暮らした。

西村氏は今も日本政府が国のために命を捧げた戦死者の遺骨を守ってほしいと願っている、と思う。

附：以下は『沈黙のファイル』(共同通信社社会部編)から引用させていだいた。

ニューギニア作戦では大東亜戦争の戦況が悪化し始めた頃、大本営はポートモレスビーを占領するMO作戦を計画したが、作戦距離は360kmもあり、密林で道もなく、河に橋もないところがあった。すべて人力で運ぶので戦車、大砲の輸送も不可能であり、食料、弾薬の補給も困難であった。このため作戦は大本営が決定するとして別にリ号作戦を検討していた。

ところが第17軍の百武晴吉司令官（昭和11年、私が広島陸軍幼年学校時代の校長）のもとに大本営の辻政信参謀が来て「大命によりMO作戦を実施せよ」と独断で命令した。大命とあればやむを得ず、第17軍は昭和17年ポーランドにトモレスビー攻撃を開始した。

その後大本営の連絡で、この命令は辻参謀の独断と判明、しかし大本営は辻参謀の越権行為を追及もせずこの作戦を認可している。

このため15、16万もの将兵が戦死どころか飢餓、病死で尊い命を失い、高山の峠では低温のために凍死している。ガダルカナル作戦でも1万9千人が餓死しており、餓島と呼ばれる悲惨な戦鬪を強制している。

辻参謀は、戦後数冊の書を出版しているが、このことに対する反省は全く書いていない。

彼はノモンハンでも独断行為をしているが、あるとき歩兵第26聯隊長（私が戦時中所属の部隊）の須見大佐を訪れたことがあった。そのとき大佐は食事中で、当番兵が空のビール瓶に入れてくれた水を飲んでいった。

辻参謀はこれをビールと思い込み、確かめもせず、著書『ノモンハン』に以下のように書いている。

「ハラ高地の須見聯隊本部に辿りついたとき、まだ陽が高いのに聯隊長は

夕食の最中であつた。不思議にもビールを飲んでゐた。この激戦場でどうしたことだろう、ビールがあると。飲まず食わずに戦っている兵の手前も憚らないで。不快の念はやがて憤怒の情に変わった。——中略——最精鋭第7師団の戦力も、聯隊長がこれでは頼みにならぬと、がっかりしながら元の師団司令部に辿りついた」

この書は昭和42年に出版されたが、須見さんはこれを読んで辻氏に「あれは水でビールではない」と抗議し、辻氏も謝罪したと聞いている。

ところが昭和50年に第2版を出版されたが、上記の文は全く削除されずに印刷されており、辻氏に反省の気持ち

が全く無い、という思いである。冒頭の写真の部に当時の当番兵が辻氏に宛てた抗議文に対する返事が印刷されているが、辻氏本人の謝罪文でなく、字も小さいので、読む人はほとんどないと思われる。

このほか軍旗の問題などたくさんあるが、須見さんは名譽毀損で訴えることはしなかったようである。

日本軍が仏印に進駐したときも、若手参謀が「進駐したら米國と戦争になり日本は焦土と化する」と警告したが、辻参謀は「日本は神國だ、戦争はやつてみなくちゃ分からないじゃないか」と反論し強行したという。彼は日米の

戦力を五分五分と考えていたのか、大本営参謀ともあろう者があまりにも杜撰な考えだったと言わざるを得ない。

開戦のとき、私は下つ端の少尉であつたが、支那事変で兵站線が延びきつており、勝ち戦の中國でさえ餓死する兵士がいたと聞いている。そんな状態で經濟大国のアメリカを相手に大丈夫かなと不安を抱いたものである。当時子供だった美作氏（陸士60期）でさえ非常に心配したとので子供の方が状況判断は正しかったと思つている。

戦時中、辻参謀は作戦の神様と言われ、尊敬していた。個人的には立派な人で、参謀でありながら第一線に出て銃弾を数発受けたら、戦場の兵士に食料を配つたり、と尊敬していた。

しかし戦後に実情を知つて、個人的には優秀な人だったかもしれないが、考えが独断的であり、頭が良いだけに上司も説得されてしまい、結果として國を誤つたのではないかと、残念に思つている。

辻氏は、戦後参議院議員でありながら、『潜行三千里』にあるように各地を回り、結局消息不明で、奥様とご息は調査のため現地に行かれたが、結果は不明で、ご家族のご心配いかにりであつたかとお察ししている。日本が戦争に踏み切つたハルノートは厳しいもので、「小國のモノナコでさ

え受けなかつたであろう」と言われている。

終戦の6カ月前、クリミア半島でヤルタ会談が行われたが、ルーズベルトは心疾患でほとんど発言せず、その2カ月後に死亡している。発言は無名の官僚ヒスが主であつたが、彼はソ連のスパイで戦後有害判決を受けている。

結局、会談は日米ともスターリンの思うがままに操られ、今次大戦の勝者は米英でなくソビエトと言う人さえある。

ドイツの敗戦後、鈴木内閣はソビエトに仲介を依頼したが、いつまでも回答が無く、終戦6日前に日ソ中立条約を破つて満洲、南樺太、北千島に侵入している。

北千島では休戦状態だつた占守島の日本軍の必死の抵抗でソ連軍の南下を遅滞したが、もしも無抵抗だつたら北海道まで占領され、東ドイツや北朝鮮のような悲惨な状態になつていただろう。

ソビエトを信用して和平交渉を依頼するなど、スターリンの思うがままに操られた当時の為政者の見解がいかに甘かつたかを思うと残念である。

以上、戦後も遺骨収集された西村氏とニューギニア戦線、ヤルタ会談その他『沈黙のファイル』からの引用を含めてご紹介した。ご意見を頂ければ有難く存じます。